

蝶の博物詩

蝶と花 1

訪花, 吸蜜



スジグロシロチョウと山桜
(1997年5月4日 野尻)

photo by

Nishiyama



モンシロチョウと菜の花
(1994年4月24日 対馬)

蝶の博物詩

蝶と花1

訪花、吸蜜

“ちょう ちょう ちょう ちょう
菜の葉にとまれ 菜の葉に飽いたら
桜にとまれ 桜の花の 栄ゆる御代に
とまれよ 遊べ 遊べよ とまれ”

これは明治14年、文部省発行の「小学唱歌集」に出た子供の歌である。昭和のはじめ、私の小学1年生の頃は、誰でも知っていた。私は長い間、菜の葉という歌詞を間違えて、菜の花と歌っていた。ここに登場する蝶はおそらくモンシロチョウであろうが、これによく似たスジグロシロチョウかも知れない。どちらも、その幼虫(アオムシ)はアブラナ科の植物の葉を食べ、性格も良く似ている。私が、“モンシロチョウは緑の葉より、黄色の花のほうが好きだよ”と主張すると、“お前、馬鹿だな。チョウは葉に卵を産みつけに来るのだ”と友人がしたり顔でいった。昭和の子供は通学の道道、菜の花が咲く畠や野原で、虫を観察していた。モンシロチョウはアブラナ科の中でもキャベツのような栽培種が好きで、スジグロシロチョウは野外種を好む。

蝶と花とは何ととっても好一对である。花の蜜には糖が含まれていて、蝶にとって主要なエネルギー源であるのはいうまでもない。花を好むモンシロチョウや大型のアゲハチョウなどは樹液や獣糞など見向きもしない。昆虫酒場に屯する森林性の蝶にくらべて、花を好む草食性の種は、より新しい時代に出現したと思われる。

昆虫が花に集ることを虫屋は訪花という。彼等はしばしば独特の言葉を用いる。“訪花”は広辞林に無いし、“吸蜜”も見当らない。小さな蝶でも一頭二頭と数える。自分たちのことを虫屋というが、別に虫を売って生業としているとは限らない。

冒頭のチョウの唱歌であるが、戦後間もなく、昭和22年頃かと思うが、“栄ゆる御代に”という言葉が怪しからんいうことで、桜の花の“花から花へ”と変わった。GHQの命令か、文部省または日教組の発想か分からない。同時に歌の起源もなぜかドイツからスペインに訂正された。

蝶は先づ色覚によって花を発見する。好みの色は蝶の種類によって違いがあり、モンシロチョウは紫、次いで黄が好みようで、赤い花にはほとんど寄りつかない。もっとも紫外線を感じ取るモンシロチョウが見る世界はヒトとは異なるので、彼等が花をどのように感じているのか分からない。

桜の花から花へ、蝶が遊び飛んでいるのを見る機会はほとんどない。鎌倉の鶴岡八幡宮の段葛の桜など、人が多すぎて、モンシロチョウの立ち入る隙がない。たとえ蝶がいたとしても、それに気がつく人はいない。ヒトは興味、関心の無いものに気づかないのだろう。

ヒラヒラと舞い落ちるサクラの花びらを、ツマキチョウでは、と思わずどっきりすることがある。

西山茂夫